油に関する研究であったが、化学的知識の乏しい金子直吉が、魚油の硬化を企てたについては、久保田のすすめがあずかって力があったものとみられる。初期硬化油事業に従事した長郷幸治は、こう語っている。

「兵庫工場の建設は、金子直吉さんの魚油加工輸出に対する企業的創意、情熱と若い久保田さんの単独の研究の成果が結びついて生まれた結晶だ。私は学生時代に久保田さんを訪れて英国の化学雑誌"Journel of Chemiced Society"の記事を読み研究見本を見せて貰って、感激したことは今も忘れることができません。」初め研究室は、魚油倉庫の一隅にもうけられ、二―三坪ほどの貧弱なものであったが、これがやがて硬化油工業へ進展していく最初の核となった。もっとも、これより先、リバー・ブラザース社の尼崎工場では日本特産の魚油と捨てられていた大豆油の絞り粕を原料として、硬化油、グリセリンから石鹸までの一貫作業の装置をすでに設置していた。このことは日本の油脂業者にはたいへんな刺激となり、これが動機となってその後の日本の油脂工業が発達の緒についたとみることができる。

さて、久保田四郎の実験室的研究は一年余りで終り、いちおう大正二年の末に工業化の見通しがついたので、脇の浜製鋼所（後の神戸製鋼所）内の中央試験所でパイロットプラントを建設することになった。この建設の衝にあたったのが、当時鈴木商店の化学部門における最高顧問格であった村橋素吉技師である。村橋技師は元鉄道院化学試験所の主任技師であったが、大正二年末、後藤新平のあっ旋で、鈴木商店へ招聘され、樟脳油分離では画期的な装置をつくった人である。この人の指導のもとに、鉄道院化学研究所時代の部下であった牧実（マキミノル）と、東京の小林商店（ライオン歯磨）にいた磯部房信（電気科学専門の技師）がこの試験工場の建設に参画した。

しかし、ここで問題になったのは水素の大量供給源をいかにするかという点であった。後に硬化油製造に乗り出した旭電化や日本曹達などは、自家発生の水素を利用したし、また、鈴木の保土谷、王子の二工場も、後述するように副生水素を利用することができたのに、脇の浜にはそういう余分の水素がなかった。だが、金子直吉がこの工業にかけたそもそもの目的は、魚油の有効的な利用、つまり硬化油という新しい商品の開発にあったので、水素は原料油脂につぐ第二の重要資材であった。従って、どういう手段で水素を安く確保できるかということが、大きな問題となったわけである。ソーダ工業と結ぶ食塩電解が、水素を副生として利用しているのであるから、それに価格的、品質的にもたちうちできる水素を製造しなければならなかったのである。ちょうどそのころ、鈴木の経営であった脇の浜製鋼所が、毎日酸素を四〇本も使っていた。この酸素は、当時わが国唯一の酸素会社であった帝国酸素（フランス人経営）から一立方米二円七〇銭で供給をうけていたが、水電解工場を製鋼所内に設置すれば、副生酸素は製鋼所で利用できるし、水素は十二分に硬化油の工業化試験に使えるので一石二鳥の名案という事になり、しかも電力から計算すると、酸素一立方米が一円五十銭くらいで供給できるというので、即刻水電解工場をつくることに衆議一決した。こうして、村橋案による水電解工場の建設が始まり、磯部房信は工場主任となって久保田の油脂硬化試験に協力した。

また、実際の運転には牧実技師があたって、久保田の油脂硬化試験に協力した。また、実際の運転には牧実技師があたり、同時に入社したばかりの長郷幸治らと協力して、酸素工場および加工装置の研究と建設に没頭した。やがて大正三年二月には発電機の据付けを完了、同年六月には磯部案の「シーメンス型」エボナイト板隔板式による電解槽も運転開始の運びとなった。が、何分にもはじめての経験であるため運転中故障が多く、なかなか水素の供給ができない。一時はものになるかどうか危ぶまれたほどであった。しかし剛直な金子直吉は、その成功を信じて、多額の赤字を顧みず、久保田らの研究を督励した。苦労のすえ建設した酸素工場が爆発事件を起したのも、このころのことであった。直接の原因は、運転工の不注意のため酸素ガス圧送ポンプの過熱によるものであったが、頻発する電解槽の事故とともに、いまだ装置研究の未熟であったことが、その主な原因であるとみられる。その後リバー・ブラザース社の装置などを参考にして、幾回も装置の改装を行ない、同年末には、村橋案による堅型レーン式二〇〇斤入りオートクレーブを二〇馬力の攪拌機で運転する硬化装置（日産一〇〇キロ）を完成して、ここにいちおう硬化油の本格的工業化の見通しをたてることができた。

余談になるが、鈴木商店が、硬化油研究に着手してから、後に述べる兵庫工場を完成して、工業的な製造を開始するまでに費やした金額は、当時の金にして、およそ五〇〇―六〇〇万円にも達したろうといわれる。一つの新しい化学工業が、実験室で基礎研究が完成しても、これを工業化するまでの苦心と犠牲ははかり知れないものがある。その意味でもこの世紀の事業に参画した最初の研究者久保田四郎、装置設置にあたった村橋素吉、そのほか磯部房信、長郷幸治、牧実らは、たんに兵庫工場を確立したというばかりでなく、いわばわが国油脂工業界の柱石であったということができよう。

なお、当初の研究員の氏名を挙げると、次のとおりである。

村橋素吉、磯部房信、久保田四郎
長郷幸治、牧　実、二階堂行徳

「屈原（くつげん）」　今村蕾橘

初凪や黄金（こがね）びかりの明石の門（と）
しみじみと枝垂（しだれ）桜を仰ぎ見る
「屈原」を読みて菖蒲の日を過す

米騒動五十周年に思う

井上　清

(1)

本年は「明治百年」とかいうことで、政府は大々的に記念の祝典や事業を準備している。明治元年は一八六八年であるから、本年一九六八年は明治百年ではなくて百一年である。小学生の算術でもわかることではないか。こんなおそまつな計算をして、政府は「明治百年記念」で、明治元年から百年の歴史の全体を「栄光の歴史」としてほめたたえる。それによって政府は、明治期に建設された大日本帝国は、一九四五年八月十五日に崩壊し、全日本がアメリカ軍に占領され、民族権の独立もいまなお完全には回復されていないことを（沖縄県のことを思え）国民に忘れさせ、旧大日本帝国の天皇主義と軍国主義の思想を、大々的に復活させよう、という寸法らしい。

ところで今年の八月は、米騒動の五十周年であり、またロシア革命干渉戦争＝シベリア出兵開始の五十周年である。米騒動は後で説明するように、現代日本の民主主義の直接の出発点である。もし私たちが、現代から将来への日本を明治期にはじまる天皇主義と軍国主義ではなく、日本国憲法の理念である民主々義と平和主義によって発展させようとするならば、私たちは「明治百年」ではなくて米騒動五十周年をこそ、深くかえりみなければなるまい。

(2)

米騒動は、よく知られているように一九一八年七月二十三日朝、富山県下新川郡魚津町の主婦たちが、米価の暴騰と生活難にたえかねて、県内産の米の県下移出をとめようとしたことからはじまる。その翌日からたちまち付近いったいの町村の主婦たちが、二百人から三百人、多いときには千人以上の集団で、町村役場米商人、資本家をたずねて、米の安売りや困窮者の救助をもとめはじめ、しばしば警官隊と衝突した。この「越中女房一揆」が富山県下の諸新聞によって県外に知らされ、八月初めから大阪および東京の諸新聞により、全国的に報道された。八月九日には、岡山県の落合町、和歌山県の湯浅町にも富山県下と同様の婦人を主とする群集の運動があり、兵庫県印南郡の大塩村（現在姫路市）では、塩田労働者が役場におしかけて救助をもとめた。

この日までが騒動の第一期で、小さな町村のわりあいにおだやかな運動であったが、この日の夜から京都と名古屋の二大都市で市民の動揺がおこり、翌十日に大暴動になった。それから十五日までの一週間が騒動の第二期で、この前に六大都市をはじめ全国のほとんどの市で、いっせいに大暴動がおこった。八月十六日から九月十二日、三池の万田炭坑の騒動が沈静するまでが第三期であり、この期には、大中都市の騒動は大体は静まり、主として小都市と農村地区にひろがり、とくに山口県宇部と北九州のいくつかの炭鉱で大規模で激烈な暴動がおこった。それ以降は全体的にしずまり、十月二十五日の富山県中新川郡の小規模な騒動で終わる。

この全期間に、民衆の暴動あるいは街頭示威行動のおこった地域は、北海道と三府三十七県にまたがり、三十八市、一五三町、一七七村あり、ほかに不穏な状態が生じた市町村が

六十八ある。その鎮圧に軍隊の出動した地点は三十四市、四十九町、二十四村、合計一〇七カ所で、出動兵力のもっとも多いときは二万二千人以上、のべ総兵力は五万人をこえる。かなりの内乱といえる。民衆の逮捕されて検事処分をうけたもの八、二五三人、うち起訴されたもの七、七七六人、懲役刑に処せられたものは無期七人をふくめて二、六四五人、ほかに死刑が二人ある。また宇部炭坑で坑夫十三人が射殺され、神戸で数人が刺殺されたのをはじめ、軍隊に殺された民衆は三十人以上と推定される。これだけの全国いっせいの大暴動は、日本歴史のこれ以前に一度もなく、以後にもない。

(3)

騒動のきっかけはいうまでもなく、米価の暴騰である。神戸市はとくにひどくて、春ごろは一升三十銭前後の普通米が、八月一日には四十銭をこえ、十一日夜の騒動ぼっぱつの日には六十銭八厘もした。「二升の米代に一円三十銭もとられる」という新聞記事もある。米は急にこんなに高くなるのに、賃金、収入はそれに見合って上るわけがない。食費、それも主として米代が生計費の大部分をしめる工場労働者、仲仕そのほか種々の日雇い労役者、職人、当時「細民」とよばれたきわめて収入不安定な雑業者たちが、これでは生活ができないのは必然であった。

米の暴騰の根本原因は、寄生地主制が支配する農業の生産力が当時の空前の高景気がひきおこした都市人口の激増、米の需要の激増に追いつけなかったことにあるが、そのうえ政府は、地主の利益を第一に考えて米価を下げる有効な政策、たとえば外米輸入関税をやめ輸入を自由にすることなどを全然行なわなかったので、一八年春から、米価は上りつづけた。そして七月十三日、政府がシベリアに出兵することが確実になったとたんに、米価は糸のきれたたこのように天高く舞い上りはじめた。神戸では七月十二日に一升三十四銭五厘の米が十四日には三十五銭九厘になり、八月八日ついに前記の六十銭以上となる。

この当時、一方では本人も気づかないうちに、民衆の思想に重大な変化が進行していた。一九〇五年九月の「日比谷焼き打ち事件」といわれる、じっさいは東京全市の警察機関の七割以上を焼き打ちした空前の反政府暴動以来、民衆が自分たちの要求を街頭の行動で為政者につきつけることがたびたびおこりはじめた。民主主義と人権の思想は、日本社会の最低辺におしつけられた被差別部落にもしみ通りはじめていた。そこへロシア社会主義大革命の波動が、日本の人心にも微妙に影響した。むろん米騒動に立ち上った民衆が、自覚した民主々義者とか社会主義者とかいうのではない。が、人間の生きる権利や人間の平等の思想は彼らの間にもあった。そして目前にみる成金のとほうもないぜいたくと、わがくらしをひきくらべたとき、もはやわが運命のつたなさをなげくだけではなくなっていた。そして民主的な新聞が、民衆のそのような気分をそだてた。さらに多くの新聞雑誌は、ときの寺内内閣の反動と軍国主義をたえず攻撃していた。

(4)

このような人心の変化と民衆の急激な生活難とが結びついたところで、米騒動は爆発した。その中で炭鉱の暴動と呉の海軍工廠労働者を主とする暴動をのぞけば、種々の職業の都市無産者の騒動の中では、神戸のそれが行動の激烈で組織的なことでは、ずい一であった。というのは第一に、神戸は大戦の景気で人口が激増し、米価も前記のように全国一、二の高さであり、またとくに神戸的現象として家賃が米価に比例し、あるいはそれ以上に高くなり、無産市民の生活難はとくにひどかった。第二に、神戸には買い占め王鈴木商店、船成り金の内田信也をはじめ成り金が集中しており、それへの反感が強かった。第三に、神戸は外米、朝鮮米の輸入港であり、その輸入権を独占した大手四社のうち鈴木と湯浅は神戸にあり、中小三社のうち二社も神戸にあり、彼らの暴利は、荷役労働者が知っていた。第四に、もっとも重要なことは、神戸には多数の近代大工業の労働者がおり、その思想的水準が高かったことである。

『歴史と神戸』という神戸の人々のつくっている雑誌の第一号（一九六二年八月）は「神戸の米騒動」を特集しているが、それにのった座談会（兵庫労働金庫発行「生活タイムス57・8・25号より転載）で、神戸米騒動で指導的役割りを果した本郷強（当時川崎造船所の旋盤工）が七野安隆という同じ川崎の労働者のことを話している。「この七野という男は、いま思うとえらい男でした。昼の休み時間でも、いつも難しい本読んでいた。わしらは当時この小柄な男を心の中でバカにしてましたんやが、平素かれのいうているいろんなことが、いつのまにやらわしらのようなものの頭にもしみこんでましたんやろな。いまでも覚えているのは、彼がこの騒動のときに、〃こうしたことがあるたびに世のなかがようなるんや〃いうてた言葉だす」と。本郷はこの七野と二人で鈴木本店に火をつけた。先進的な労働者の思想が、こんなぐあいにいつとはなしに大衆に影響している。

(5)

米騒動は、第一に、婦人、被差別部落の人および一般の労働者、農民に、自分たち自身の大衆行動の威力を自覚させ、世間にもそれを知らせた。第二に、軍隊と警察という国家権力の中核が、どの階級のためのものであるかを、全人民にばくろした。神戸の騒動では、この点がとくにはっきりでてくるが、いま具体的な例をあげる紙面がない。ここから第三に、働らく人民大衆のための民主々義の運動がはじまる。明治の自由民権や米騒動前の民本主義は、有産階級のそれであったが、米騒動後にはじめて、無産階級の民主々義すなわち現代の民主々義の運動がおこる。生きる権利は私有財産権に優先する。生きるためにはいっさいの法律を破ってよい、ということを、福田徳三博士のような有名なブルジョア経済学者がいい出す。

第四に、米騒動のぼっぱつと政府のシベリア出兵の宣言（八月二日）また遠征軍が東京から東海道線・山陽線を通過するのとは、同時であったが、民衆は出兵部隊を見送りもしなかった。有力な大新聞・大雑誌は、出兵反対の世論をもり上げ、出征のことよりも各地の民衆の動きを報道した。こんなことは太平洋戦争終結前には、ほかにないことで、ここに、知識人の理想主義や宗教家の絶対平和主義とはちがった、民衆の生活と直結した現代的な反戦平和主義がはじまったのである。

(6)

さいごに面白い事実をあげよう。毎年夏は学生野球で賑うが、この年も甲子園での第四回全国中等学校野球優勝大会がせまった。それはあたかも米騒動の最中であった。

その開会予定の前日、八月十六日主催者朝日新聞社は、参加選手団の同意を得て大会をにわかにとりやめた。その理由を、選手団および全国の学生につげた「社告」はいう。

〃米騒動は学生の周知する範囲外のことであるが、人民が生活の安定を奪われたために諸君の父兄が深憂しているとき、その父兄の憂いを共にするのは『学生諸君の当然の責務である』その上政府が言論を弾圧して各地の事件の報道をゆるさず、社会を不安におとしいれている中で、『野球大会を開いて歓呼の声をあげる』のは、忍びがたいことではないか。『今や形勢はまことに重大であります。このため諸君が受けた打撃は、無意識に諸君の脳裡に重大な印象を刻みつけます。その印象の刻み目をいっそう深からしめる為にも、本大会を中止しなければなりません』大会中止のぎせいは大きい。しかしそのぎせいによって得られる教訓の方がはるかにたいせつである〃と。

学生は社会に関心をもつな、野球でもやっておれ、とばかりにういまの政府は、この、青年を真の意味で愛しみちびく言論を何と見るであろうか。〃そんなことをいう新聞があるといけないから「明治百年」をいっそう盛大に祝おう〃とでもいうのだろうか。

（京大人文科学研究所教授）

米騒動余談

＝「大正七年の長い夏」を観劇して＝

柳田　義一

回顧して五十年前僕が鈴木商店に入店してまもなく、全く予想もつかぬ米騒動が勃発した。

その頃の思い出は今到底言葉に云い尽くせない。

当時の鈴木の事業は世界的に動き、飛ぶ鳥も落す全盛の頂点に立った為でもあろう。噂が噂を生み、政府の命令で他店よりも比較的輸入米多量米穀を取り扱ったところから遂にこの災禍を招いてしまった。八月九日一升六十二銭八厘と云う米の高値に市民は驚きと恐怖を感じさせた。小学校教員の給料平均二十七円の世である。

飢餓地帯にひしめく群衆は遂に暴徒と化し、軍隊出動の破目に迄飛躍したことは千載の痛恨……八方から憎まれた鈴木商店の米買占は、全く無根の事実にせよ港都をこと迄騒が